



愛する司書達への手紙

福島県立図書館長 永澤 裕二

義務教育と図書館だけが、利用料が無償と法律で規定されている。貧富の格差が、次の代に連鎖しないための制度である。富める者も、そうでない者も、自立した生活を送ることができるように、最低限の教育と、学び・知る権利を保障した制度である。コロンビアからの難民の子であったカーネギーは、満足な教育を受ける機会がなく、図書館で勉強し、世界の鉄鋼王と呼ばれるまでになった。

この春、図書館に勤務するようになるまで、浅学にして知らなかった。図書館とは、無料の貸本屋、あるいはテスト前の勉強スペース。これが私の半世紀以上の人生の認識であった。

図書館は宝の山である。本を始めとする資料と言う宝の山。利用者と資料との出会いを取り持つ司書という宝。この何れかが欠けても、図書館は満足に機能しない。しかし、司書の存在価値を、どれだけの利用者が認識しているだろうか。

蔵書検索端末を叩けば、必要な資料が見つかる。それを貸し出しカウンターへ持っていけば、担当者が資料を探してくる。で、あれば、専門的知識を持った司書までは必要はない。事実、多くの図書館では、司書の非常勤化、無資格者の配置が進んでいる。それどころか、図書館の指定管理者制度移行までが行われ始めている。

ある会合で、どうして司書の数が増えないのかとの問があった。司書の必要性が、一般社会で認識されていないからであると答えた。冷たい答えではある。専門職の多くは、仲間内で仕事をすることが多い。そして、その成果を顕在化させることがほとんどない以上、必然的に、一般社会で、司書の存在価値が認知されることもまた、ほとんどないのである。その価値が認知されなければ、数が減るのは必然である。

図書館の宝、司書達よ。自分たちの仕事を表舞台に出しなさい。一般社会にしゅしゃり出なさい。司書をもっともっと活用してと、こんな手助けもできますよと訴えなさい。

謙譲は美德かも知れない。しかし、あなた方がいなくなれば、もう一つの宝、資料も活かされずに死蔵されるだけになってしまう。先人の文化が活かされなくなってしまふ。もっと深く探求できたはずなのに、表面だけの研究で終わってしまう。

あなた方が、自分たちの存在価値を世に訴え、認めさせることは、あなた方のためだけではなく、先人が伝えてきた文化を活かし、今の人々のこれからの人生を活かし、世界を正しい道に進ませることに繋がることである。

司書よ、声を出そう。プロの司書として、今何ができるかを考えよう。あなた方のフィールドは、図書館という建物の中ではなく、その外にある。